

『湯けむりの向こうに』（オリジナルバージョン）

作者 浅川美代子

上演 山口県立山口高等学校銀鐘祭(文化祭)

作品紹介 夏のある日、東京からやってきたライターのおケミズはローカル線の小さな無人駅に降り立った。そこに現れた温泉守の老人モリノは、おケミズにある不条理な要求を突きつける。山間の町「ゆのまち」のちいさな物語。

登場人物 3人(男3) ※性別の変更は可能です。

上演許可を得るための連絡先 asakawa.miyoko.tg@m.ysn21.jp

*2020年度上演作品の元となった短編です。上演時間15分。

「湯けむりの向こうに」 浅川美代子

登場人物

オケミズ (温泉ライター)

カガミ (町役場の観光課職員)

モリノ (温泉守の老人)

ローカル線の小さな駅で男が列車を降りる。手には立派なカメラ。駅は無人。景色を眺めながら改札を通ろうとすると、行く手を阻まれる。

オケミズ は。どういうこと。

見ると、改札にチェーンが掛けられている。しかも、錠がいくつも。役場のカガミ、チェーン越しに現れる。

カガミ すみませーん。遅れちゃいまして。

オケミズ え。

カガミ 観光課のカガミです。よろしくお願いします。(チェーン越しに名刺渡す) オケミズさんですよ。ようこそユノマチへ。

オケミズ どうも。

カガミ お待ちしていましたよ。今、開けますんで。(錠を開け始める)

オケミズ いつもこうなんですか。

カガミ いえ、今日が初めてです。この春、観光課に配属されたばかりで。オケミズ いや、この駅、いつもこうなんですか。

カガミ 無人駅、初めてですか。

オケミズ いえ。でも、ここ(改札)が通れないのは初めてです。

カガミ すぐ開きますんで。

オケミズ もうかなりかかっていますけど。

カガミ、たくさんある錠を外し続ける。

外しても外してもまだまだ沢山錠が係っていて、チェーンはなかなか外れない。

モリノ そうそうたやすく外れてたまるかい。

老人がカガミの後ろに仁王立ちしている。

カガミ モリノさん、ちょうどよかった。手伝ってください。ここがどうしても開かないんですよ。

モリノ 鍵ならここにあるわ。

カガミ 助かりました。

と、手を出すのが、モリノ、鍵を懐へしまい込む。

モリノ (オケミズに) あんた、どっから来た。

オケミズ 東京です。

モリノ はー。で、何の用事か。

オケミズ 取材ですよ。

モリノ 何の。

オケミズ ここに温泉以外何があるっていうんですか。

カガミ 役場にもご連絡いただきましてね、これからご案内するところなんですよ。

モリノ 断る。

オケミズ・カガミ はあ？

モリノ お前のようなやつに入らせる湯はねえ、とつとと帰れ。

カガミ モリノさん、オケミズさんは、今一番の売れっ子温泉ライターなんですよ。

モリノ 火い付けようってのか。

カガミ ライター違いです。

モリノ けしからん、帰れ。

オケミズ お前の様なやつって、なんですか、それ。何がいけないっつーんですか。

モリノ それそれ、それじゃ。そういう無礼なものの言い方するやつにロクなのはおらん。

どうせ、またわしらの大事な湯を土足で踏みにじる気じゃ。早う帰れ。

カガミ モリノさくん、町のことも考えてくださいよ。この町が生き残るには、あの温泉

しかないんですよ。温泉で町おこし、これですよ。

モリノ 町おこしか。ふん、バカのひとつ覚えみたいなのに、町おこし。お前ら役場がそうじ

やから、よそのモンになめられるんじゃ。しつかりせんかい。

オケミズ なめてないっすよ。オレは純粹に、隠れた名湯を発見して、世の中に広めたい

んですよ。心から温泉を愛してますから。

モリノ 発見！ わしらのご先祖が見つけた湯を、発見！ はっ、ずうずうしい。

カガミ まあまあ、モリノさん。そこは言葉のアヤってやつで。

モリノ わかった。じゃあ、誠意を見せろ。

オケミズ 誠意。

モリノ これまでの悪事の数々を、全部謝ってもらおうじゃあないか。

オケミズ 数々って、今日初めてここに来たのに、何をしたって言うんですか。

モリノ いいや、お前はお前の仲間を代表して、わしらに謝罪するんじゃ。

オケミズ 仲間ってなんですか。

カガミ モリノさん、オケミズさんは、フリーのライターなんですよ。今日もこうやって

お一人で。

モリノ これまでもお前みたいなのが、何人も来たんじゃ。

オケミズ オレの知り合いには、ここ、知ってるやつはいませんよ。でなきや、オレが見

つけたことにならないじゃありませんか。

モリノ お前みたいなのが、と言うたじゃろうが。忘れもせん。ワシの足腰がまだ達者じ

やったころじゃ。

カガミ はあ、それは相当昔ですなえ。

モリノ くら、役場。お前も知らんのか。

カガミ と申しますと。

モリノ ふん。もう何年も昔じゃ。お前みたいなカメラを提げたモンが、ワシらの湯にや

つてきて、写真を撮っていきよった。湯には入りもせずに、写真だけじゃ。ふざ

けおって。

オケミズ いいじゃないっすか。大事な湯に、誰も入らせたくないんですよ。

モリノ 湯なんかなんもわからんくせに。おかしげな雑誌に載ったとかで、きやーきやー

きやーきやーうるさいねえちゃんらが、毎週毎週押し寄せるようになったんじゃ。

カガミ ああ、女性誌いいですねえ。やつぱり旅行誌よりPR力ありますなえ。

モリノ おかげでワシらの湯治場は台無しじゃ。

カガミ 台無しじゃないですよ。宣伝がうまくいって、観光客がどつと。これが町おこしですよ。そうか、前にも成功してるんですね。うん、間違いない。

モリノ 町のモンが湯を使えんようになるのに、何が町おこしか。

オケミズ 温泉しかない町に、お金が入るんですよ。そしたら、もっといいものが手に入りますよ。

カガミ そうです、その土地の財産でお客さんを呼ぶ。町が潤う。これが町おこしです。

モリノ うるさい。こら、役場。

カガミ 私のことでしょうか。

モリノ お前がこいつを謝らせろ。

カガミ 私がですか。

モリノ ワシの気が済むようにこいつを謝らせたなら、ここを開けてやろう。

カガミ がんばらせていただきます。

オケミズ なんてあんたがそんなに偉そうにするんだよ、じいさん。

カガミ モリノさんは、あの秘湯がある山の地主なんですよ。許していただかないと、湯治場には近づけません。

モリノ いらんこと言うたらんで、早う頭下げさせえ。

カガミ はいっ。オケミズさくん、ここはひとつ、良い記事を書くためということで、ちよつとだけ謝ってみていただけませんか。

オケミズ 嫌です。

カガミ ちよつとでいいんですよ。簡単でしょ。

オケミズ 謝罪にちよつともたくさんもないでしょ。

カガミ 温泉の写真、撮りたいでしょう。

オケミズ 撮りたいですよ。オレは、温泉のすばらしさを全国の、いや世界の人々に伝えたいんです。誇りもって仕事しますよ。だから、こんな田舎にだってやってくるんです。

モリノ 田舎が嫌なら来るな。

オケミズ 嫌じゃないって言ってるんですけど。いちいちつかかるなあ、このじいさん。

カガミ オケミズさん、落ち着いて。深呼吸しましょう。

オケミズ 落ち着いてますよ。

モリノ 落ち着いとるやつと言いぐさがこれじゃ。

カガミ モリノさん。(オケミズに) 謝りましょう。いいですか、これも社会人の重要なスキルです。私が教えますから。

オケミズ やつてもないこと、謝れませんか。

カガミ オケミズさくん。もしかして、素直ににごめんなさいが言えないタイプですか。

オケミズ タイプとかじゃなくて、おかしいでしょう。どこの誰がやったかわからないことでオレが謝罪するとか。じゃあ、カガミさん、例えば、どこのだれだかわからないヤツがあなたを殴るとしますよ。で、そいつが走って逃げちゃって、ここにたまたま現れた犯人となく顔の似た人が、全くの赤の他人が「申し訳ございません」って謝ったら、あなた、納得するんですか。すつきりするんですか。

カガミ そりゃしませんね。

オケミズ でしょ。そういうことを、オレにやれって言ってるんつすよ。

カガミ 極端な例だなあ。

オケミズ おかしいですよ。

カガミ でも、オケミズさんと同業の方のことですし、ここはひとつ、温泉ライター代表、

ってことで。

オケミズ しません。

カガミ 日本一の温泉ライターってことで。

オケミズ おだてたってだめです。

カガミ オケミズさくくさん。

オケミズ それに、そのライターだって、なにか謝らなきゃいけないようなこと、しましたか。この、何もない町に、客を呼んだんでしょ。感謝されて当然なのに、逆じゃないですか。日本全国の温泉ライター代表して、感謝状もらいたいくらいですね。

カガミ じゃあ、どうでしょう。オケミズさんは「ごめんなさい」、モリノさんは「ありがとう」で、お互いチャラっていうのは。

モリノ ワシはありがたいなんてひとつも思ったらん。

オケミズ 絶対にしません。

カガミ、困り果てる。

カガミ 町長に相談してきますー。

カガミ、退場。

モリノ 逃げよったわ。お前も帰れ。ここは開かんし、もう案内人もおらんぞ。

オケミズ 帰りますよ。こんな田舎までわざわざやってきたのに、罪人呼ばわりなんて、冗談じゃない。

オケミズ、ホームの方を向く。

モリノ ふん。その勢いでわしらの悪口でも記事にせい。

オケミズ 誰も読みませんよ、そんなもん。オレは温泉のすばらしさしか書きません。

モリノ 湯に入りもせんで、わからんじやろうがなあ。

オケミズ 入れてもらえませんでしたから。じいさんもとっと帰ったらどうっすか。

モリノ よそモンが消えるまで番をせんといけんからの。

無言でチェーンの両側にたたずむ二人。オケミズは線路を見つめ、モリノに背を向けている。

モリノ あの湯はリユーマチに効く名湯じゃ。うちのばあさんも頼りにしとった。人がわんさか来るようになって、一時期、湯がすっかり枯れてしもうた。寒い冬じゃつたのお。膝が痛かったろうに文句も言わんで。雪の深い朝じゃったのお。

オケミズ ばあさんって、奥さん？

モリノ 独り言じゃ、黙っとれ。

オケミズ 勝手に聞こえてくるんで、もうちよっと小さい声でお願いできますか。

モリノ (もつと大きな声で) 雪の深い朝じゃった。

オケミズ うるせー。(と、イヤホンを装着しようとする)

モリノ もう一回、湯に入らせてやりたかったのお。

オケミズ、動けない。

モリノ 本当に必要なモンに、あの湯は、使わしてやりたいんじや。

オケミズ、振り返る。遠くから、列車が近づく音が聞こえてくる。

オケミズ じいさん。

モリノ これに乗らんかったら、次の汽車は2時間後じや。

列車がホームに入ってくる。

オケミズ 帰ります。

モリノ おお、帰れ、帰れ。

列車が止まる。

オケミズ じいさん。

返事はない。

オケミズ モリノさん。また来ます。

モリノ もう来んでもええぞ。

オケミズ ありがとうございます。次はカメラを置いて、手ぬぐい持ってきます。

オケミズ、列車に乗り込む。

発車と同時に、カガミが戻ってくる。

カガミ モリノさん、どうでしょう。町長立ち会いのもと、あれ？

モリノ 帰りおったわ。

カガミ えー。

モリノ、懐から鍵を取り出して、チェーンを外す。

モリノ 今度、さっきの若いのが来たら、通してやってくれ。

カガミ じゃあ、オケミズさん、謝罪されたんですね。

モリノ いや。

カガミ じゃ、なんで。

モリノ わかったようじゃったからの。

カガミ 何がですか。

モリノ ワシの思うたことが、の。

カガミ 謝罪じゃなくて。

モリノ こんなもん、くぐりゃあよかったのに、まじめなヤツじや。

モリノ、鍵をカガミに渡してゆったりと歩いて去る。

カガミ、モリノの後ろ姿を見送る。